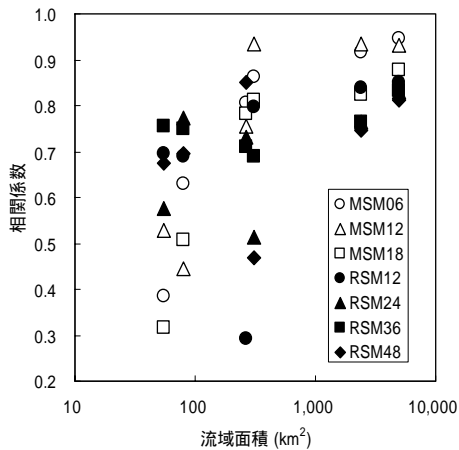
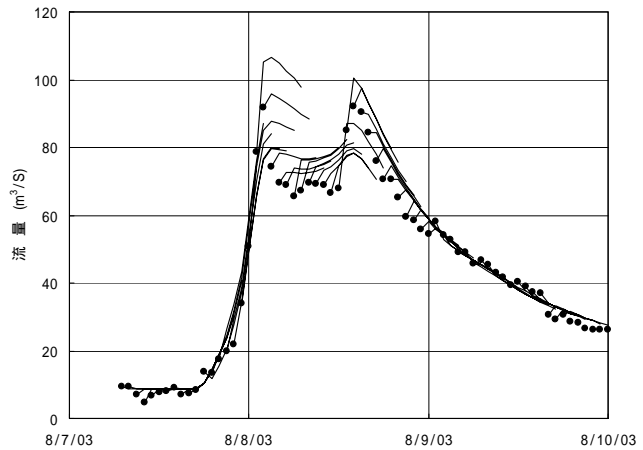


- MSM、RSM による総降水量の予測値は、分散が大きいものの、平均的には概ね実績値に相当しており、発生する洪水の大略の規模を把握する目的での利用が可能であると考えられる。

さらに、【図 24】に示すように、精度の面から数値予報による予測降雨は 1,000 km<sup>2</sup> 以上の空間スケールでとらえる必要がある事や、【図 25】に示すような降雨予測 + 流出予測計算の結果からは、降水短期予報は数時間先までの流出予測に利用可能であることも判ってきた。



【図 24】流域面積と予測精度の関係

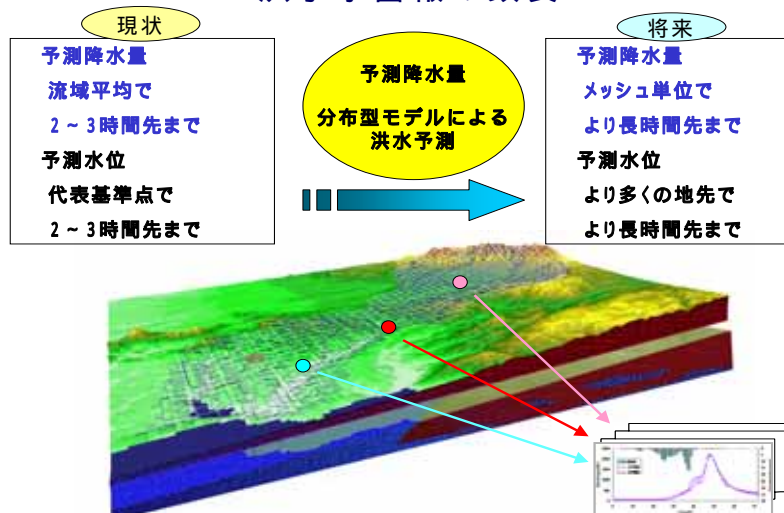


【図 25】降雨予測を取り込んだ流出予測計算の例

## (2) 次世代の水管理技術

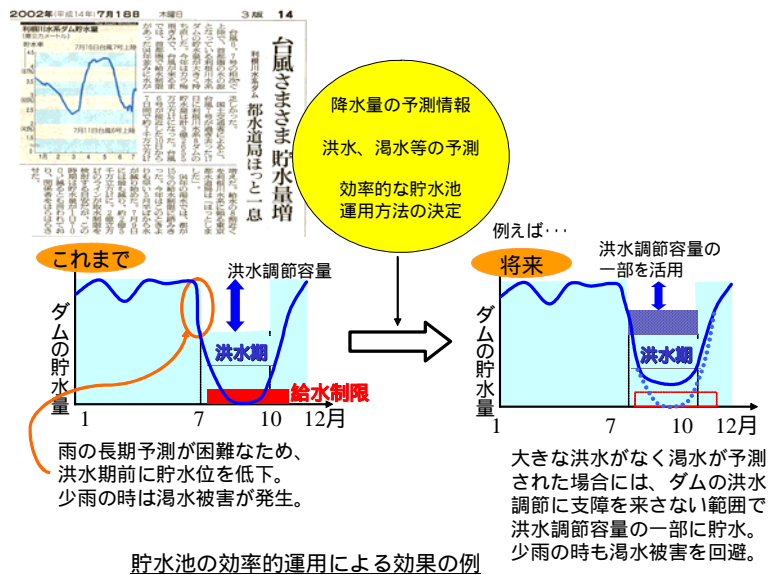
気象予測の世界ではソフト・ハードの発展がめざましく、今後、精度、解像度、予測時間は益々改良されていくことになる。例えば洪水予警報は、【図 26】のように「代表基準点で 2~3 時間先」から「多くの地点（任意地点）における長時間予測」が可能となる。気象予測の高度化を受けて、流出モデルも内水を含む地表面雨水流下モデルをベースに、各種貯留施設を考慮したより現実的なモデルが力を発揮することとなる。

### 洪水予警報の改良



【図 26】よりきめの細かい洪水予報のイメージ

また、1ヶ月先までの長期の気象予測の精度が水管理に活用できるレベルにまでなると、【図 27】のように、渇水期・洪水期ともに、より安全で効率的なダム運用が可能となる。



【図 27】貯水池の効率的運用のイメージ